The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	〈助かる〉社会に向けた災害ボランティア : 遊動化のドライブの活性化
Author(s)	渥美, 公秀
Citation	災害と共生. 2019, 3(1), p. 49-55
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73155
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈助かる〉社会に向けた災害ボランティア
ー遊動化のドライブの活性化ー

Alternative Disaster Volunteers
ー Beyond the Dichotomy of Help and Being Helped ー

渥美公秀[1]
Tomohide ATSUMI

要約

本研究は、災害ボランティアの秩序化を推進する秩序化のドライブと、災害ボランティアの臨機応変な対応を推進する遊動化のドライブについて、両者の異同を原理的に検討したものである。まず、「助けるー助けられる」という関係について、秩序化のドライブが究極的に目指す事態が助けることの精緻化と助けられることの精緻化へと進むが、遊動化のドライブは中動態としての〈助かる〉ことに接続することを示した。次に、〈助かる〉社会を実現するための方略を、不特定多数を対象とするか否か、制度に依拠するか否かという観点から４つに分類して試論的に提示した。最後に、制度に依拠しない方略の優位性をもとに、遊動化のドライブを堅持した災害ボランティア活動について実践的な展望を述べた。

Abstract

The present study examined how disaster volunteers led by the drive for institutionalization were, in principle, similar to or dissimilar from those led by the drive for "nomadization." First, I focused on the "helping" versus "being helped" relationship and found that the drive for institutionalization polarized each relation (i.e., either helping or being helped), whereas the drive for nomadization brought middle-voice relations into the activities of disaster volunteers. This new concept suggested four tactics to realize the middle voice situation, categorized by an unspecified versus specified number of people and institution versus ad hoc relations. Finally, it revealed that tactics without institutionalization had advantages for establishing a society that embodied the middle voice. In conclusion, disaster volunteers led by the drive for nomadaization should be given higher priority than those motivated by the drive for institutionalization.

キーワード: 災害ボランティア、秩序化のドライブ、遊動化のドライブ、中動態、〈助かる〉社会
Keywords: Disaster Volunteers, Drive for Institutionalization, Drive for Nomadization, Middle Voice, A Society with Middle Voice

１．問題

「ボランティア元年」と呼ばれた 1995 年の阪神・淡路大震災の被災地では、大規模なボランティア活動が展開された。事前に活動マニュアルや災害ボランティアセンターという仕組みが準備されていたわけではなく、その場その場で被災者のニーズを汲み取りながら、臨機応変に活動することになった（渥美, 2001 など）。災害ボランティア活動に大学生をはじめとする若者が多く参加したこと（菅, 2008）もあって、災害ボランティアは閉塞感の漂っていた当時の社会を変革する起爆剤になるのではないかと注目され、ボランティア革命（本間・出口, 1995）という言葉さえ見られた。一方、市民が臨機応変に対応していては、活動に参加する人々の被災者への想いを効率的に被災者に届けられないことがあるとみて、災害ボランティアのコーディネートが必要だという議論が出てきた（菅, 2008）。その背後には、災害ボランティアの臨機応変な活動が、既存の秩序とは必ずしも相容れないと感じる人々からの懸念も含まれていたように思われる。

こうしてボランティア元年を振り返れば、臨機応変に対応する災害ボランティアの姿を称揚する動きと、より秩序だって行動するように促す動きが、既に萌芽的に見られたことが改めて理解できる。渥美（2014）では、前者を促進する社会の動向を「遊動化のドライブ」、後者を促進する社会の動向を「秩序化のドライブ」と呼んで区別した。ドライブという言葉は、社会の動向であって、特定の個人や団体

*1 大阪大学大学院人間科学研究科 教授・Ph.D.（心理学）
Professor, Graduate School of Human Sciences, Osaka University, Ph.D. （Psychology）

の活動を指すものではない。また、いずれかが絶対的に正しく、他方が誤りだということもない。その後、四半世紀に至ろうとする災害ボランティアの展開過程は、両者のダイナミズムによって既述することができ、現状では、両者の拮抗が崩れ、秩序化のドライブが席巻していることが懸念されると分析した（渥美, 2019）。

実践的には、現場において、両ドライブの両立、併用が求められる。確かに、災害ボランティア活動に初めて参加する人々にとって、被災地に行くと開設されている災害ボランティアセンターは、絶好の入口になる。そして、災害が発生すれば被災者への救援を行いたいとする人々が多く存在する（例えば、内閣府, 2014）ことは、こうした需要の存在を示している。一方、災害ボランティアセンターの硬直的な対応が、災害ボランティア本位ではあっても、被災者本位にはなっていないことの弊害は既に事例とともに指摘されている（例えば、大門・渥美, 2018）。現実には、本格的な被災者支援を展開する際に、災害NPOと緊密に連携して運営されている災害ボランティアセンターや臨機応変な対応を旨としている災害NPO等を介して活動に参加することによって、より被災者本位の活動が展開できる。

しかしながら、両ドライブを実践的に交雑させるのではなく、それぞれが究極的に目指す社会を展望してみると、そこには、全く異質な2つの社会が開けはしないだろうか。そこで、本稿では、両ドライブの相違をより原理的に検討してみたい。具体的には、「助ける－助けられる」(「支援する－支援される」)という関係を軸に、秩序化のドライブが究極的に目指す事態（第2章）と、遊動化のドライブが究極的に目指す事態（第3章）を対比する。その上で、後者の目指す社会を実現するための4つの方略を試論的に提示して（第4章）、さらに実践的な展望を述べる（第5章）。阪神・淡路大震災当時に予期された災害ボランティアによる変革は、遊動化のドライブの目指す社会の実現ではなかったかとの考えが基底にある。

２．秩序化のドライブ：支援/受援の技法開発

まず、現場における災害ボランティアの様子を概観してみよう。現在では、災害ボランティア活動に参加する際に、地元の社会福祉協議会等が開設した災害ボランティアセンターに登録し、センターにコーディネートされて活動するという標準的な手順が存在する。センターは、災害ボランティア活動に初参加の人々にとっては諸情報を提供するなど効果を発揮することもあるが、活動希望者とセンターで集約した限りでのニーズの調整を効率的に処理することが主たる作業となって、肝腎であるはずの個々の被災者のニーズの把握・対応が二次的になってしまう場合がある。また、希望者もセンターが指定した活動に専念するあまり、被災者の前で臨機応変な対応ができない事態が発生する（大門・渥美, 2018）。ここに、災害ボランティアがセンターの指示には対応しているが、個々の被災者には応対していないといった皮肉な状態が発生する。

この現状を改善するために、秩序化のドライブは、まず支援力の向上を推進する。具体的には、災害ボランティアおよび災害ボランティアセンターの助ける技術の改善、向上、周知を行い、より効率のよい助け方の開発へと向かう。

一方、支援する側の支援力だけではなく、支援される側には、支援を受け入れる力も必要だとして、受援力の向上といった動きも展開されてきている。実際、内閣府は、「防災ボランティア活動の多様な支援活動を受け入れる：地域の『受援力』を高めるために」と題したパンフレット（内閣府, 2010）を発行し、「被災地の再建には、ボランティアの支援力とともに被災地の『受援力』が欠かせない」と説いている。

整理すれば、秩序化のドライブのもとでは、助ける－助けられる（支援する－支援される）という能動と受動のペアが想定されて峻別され、それぞれ支援力、受援力とされる。そして、支援力、受援力が研ぎ澄まされることがよりよい支援に繋がると考えられるようになる。

多くの場合、支援力、受援力に関する議論は、実際の災害ボランティア活動の経験を集約したり、現場で見られた問題点と改善案を共有したりする場を通じて、支援・受援の技法としてマニュアルに整理されていく。無論、被災者も被災者の置かれた状況も多様であるから、支援は多様に展開しなければならないし、受援も多様であるとし、マニュアル化を批判することはできる。実際、マニュアル化の弊害は明らか（大門・渥美, 2018）であるからである。

ここで注意したいのは、秩序化のドライブが何らかのネガティブな指摘を受けると、通常、それを取り立てて批判したり、排除したりするのではなく、むしろ真剣に検討し、さらに改善して新たな技法へと昇華する動きをとる（そして、マニュアルの改訂版を作成する）ことである。こうした改善を経て、技法はますます研ぎ澄まされると考えられるからで

ある。その結果、秩序化のドライブはますます過熱していく。

秩序化のドライブのもとでは、そもそも助ける側－助けられる側というカテゴリーの存立が妥当であるのかという問いは発生しない。そこでは、文字通り、秩序だった効率的な支援と、それを、効率的に受け入れる受援力の向上が目指されることになる。秩序化のドライブを極限まで追求した先に開ける社会は、助ける人々と、助けられる人々が固定的に存在し、完全な支援、完全な受援の技法をもつ社会である(1)。

３．遊動化のドライブ：〈助かる〉社会へ

秩序化のドライブが、助ける側と助けられる側を峻別した上で、両者の活動の効率化を支援力、受援力として高めていくことを求めるのに対し、遊動化のドライブのもとでは、災害ボランティアは臨機応変に被災者と関係を展開していくことが重視される。そこに支援力・受援力という言葉は馴染まない。

実際、災害現場でしばしば耳にする「助けに来たつもりが助けられた」という災害ボランティアの発言や、「支援する－支援される」関係を無効化して災害ボランティアと被災者が対等な人間関係を築くべきだという言説は、助ける側と助けられる側を固定的に峻別するような事態からは生まれない。そこに展開しているのは、臨機応変な関係を重視する遊動化のドライブである。

ここで、阪神・淡路大震災における災害ボランティアの原点に回帰してみよう。筆者は、災害ボランティアにとって最も大切な姿勢は、「ただ傍にいる」ということだと指摘してきた（渥美, 2001）。「ただ傍にいる」というのだから、助けもしなければ、助け方が問題になるわけでもないし、受援という発想もない。無論、積極的に何かを行うのではなく、「ただ傍にいる」ような災害ボランティアの姿勢は、効率的にボランティアを動かそうとする秩序化のドライブよりも有効だろうか？「ただ傍にいること」は、災害ボランティア活動に関わる一定数の人々に不安を喚起するだろう。災害ボランティアは、被災者に「何かをしてこそ」の行為であると想念されるからである。この点は、別稿（渥美, 2019）で、被災地のリレーをもとに議論しておいたので、そちらを参照していただきたい。

以下では、「ただ傍にいること」を手がかりに、遊動化のドライブのもとで生じている現象を分析してみよう。その際、『中動態の世界』（國分, 2017）を参照しながら、その含意を原理的に考察する。

國分（2017）は、能動態－受動態以外に、もう1つの態として中動態が存在してきたことを指摘した。中動態への注目の契機となったのは、著書の冒頭にあるように、日々「自分の意志を示さなければならない」「責任を果たさなければならない」という声に苛まれている依存症の人々との接触であった。つまり、その人自身の意志ではどうしようもなく責任もとれない場面であるにも関わらず、その人の行動がその人自身の意志・責任へと帰属される場面である。

われわれは、自身の考え方や行動を規定する言語のレベルにおいて、能動態－受動態（「する―される」関係）にどっぷりとつかっている。この二項で考える限り、少なくとも能動側、受動側の二者が想定され、能動側には、その行為に対し意志と責任が帰属・追求され、受動側にはそれを受け止めること（受援力）が求められる。言い換えれば、われわれは、主語の明確な世界にいることを正常（少なくとも見かけは）とした社会に住まうのが通常であり、依存症の人々に典型的なように、意志も責任もない状況にあるからこそ、主語が明示できないのに、無理に自身が主語だと想定され、自身に意志（の弱さ）と責任があるのだと言われてしまい、そのことに苦しみ「小さくされて」（本田, 2006）生きざるを得ない人々が存在することが捉えがたくなっている。

ところが、能動－受動に束縛されないもう1つのあり方があるというのが中動態の議論である。すなわち、誰の意志でもなく、責任でもなく、そうなってしまうという事態、いわば、主語の無効化した事態である。中動態は、何も不思議な事態を表現しているのではなく、日本語がそうであるように主語が不在であっても了解できる事態を考えれば、むしろ自然な表現でもある。

ここで「ただ傍にいること」というキーフレーズに戻れば、災害ボランティアは、文字通り、無条件に傍らに存在するだけであって、まずもって能動態－受動態以前の姿勢だと言えよう(2)。そこには、意志や責任を問うというよりも、そこに存在すること、その偶然性が強調される。

檜垣（2019）は、最近著において、助けるという行為・表現を分析し、誰が誰を助けているのかと問うた。災害など突然の事態では、助ける人と助けられる人が峻別できないこと、従って、助けるための計画や、助けられるための計画が原理的に成立しないことを指摘し、中動態に言及しながら、助ける－

助けられるではなく「助かった」（受動態の完了形でもある受動態）という表現をとりだして議論している。具体的には、「あぁ、助かった」という発言には、誰が助けたかは明確ではなく、むしろ、そこに（誰が助けたのでもない）偶然性、人為を超えた自然（自ずと然なる）によることを見るべきだと指摘している。そして、生病老死を射程に入れれば、人間は根本的に、中動態的な生を生きざるを得ないのではないかと結論づけている。

檜垣（2019）によれば、災害においても、助ける人と助けられる人は固定されない。さらに、強い意味での助けることは、失敗し続けると指摘する。なぜなら、本来中動態的な、偶然性を帯びた無主語の世界において、能動的に振る舞うからである。しかし、助けることによって、人々に少しでも安寧がもたらされるなら、その行為は失敗ではあっても、決して誤りなのではないし、意味がないわけでもないと述べる。助けるという事態は、結局、われわれが、自然をすべてコントロールできるはずがないことを示しているだけだからである。

檜垣（2019）は、ボランティアにも言及して、「志願」としての意志の方に価値が置かれがちだが、ボランティアは素人であり、プロではありえないことが強調されるべきだろうとの洞察を提示している。そして、効率的に助かった方がよいということだけを論じることは、助けることの本質から逸脱してしまいかねないと指摘する。

こうした議論を災害ボランティアに援用すれば、災害ボランティアを「助ける」－「助けられる」という関係では捉えられないことは明らかである。「ただ傍にいること」という能動－受動以前、主語化以前の事態を称揚することは、まさにこの事態－中動態的な事態－にこそ焦点を当てるフレーズであったのだ。

前章で述べたように、秩序化のドライブが徹底されると、固定的に捉えられた助ける側、および、助けられる側の各々の技術が究極まで追求される社会が開けるのに対し、遊動化のドライブのもとでは、災害ボランティアは中動態的に振る舞うことを推奨され、そのことが徹底された先には、「あぁ、助かった」と感じる社会が開ける。ここでは、遊動化のドライブが徹底された先に展望される社会－「あぁ、助かった」と事後的に思える社会－「あぁ、助かった」と感じられる社会－を〈助かる〉社会と表示しよう。遊動化のドライブに導かれた災害ボランティアを含む社会は、〈助かる〉社会である。

４．〈助かる〉社会に向けた4つの方略

原理的な検討からは、災害ボランティアには中動態的な振る舞いしかありえず、その先には〈助かる〉社会が展望されるのであった。ただ、実践的には、いかにして〈助かる〉社会の実現を図ることができるのかということが問題になる。最後に、このことを4つの方略を提示することで検討しておく。

素朴に「あぁ、助かった」と感じる場面を想定してみよう。檜垣（2019）は、テストの山が当たった場面などを例として挙げて、その偶然性にリアリティを与えている。偶然性を帯びた中動態的状況については、枚挙に暇がない。例えば、悪事をはたらいたけれども、それを指摘する人々から、今回は見逃されたので「あぁ、助かった」という場面、車両事故で乗るはずの電車が遅れたことで、遅延がなければ会えるはずのない人に駅でばったり会えて「あぁ、助かった」といった具合である。災害ボランティアの文脈に戻せば、前章で紹介したように、「助けに来たつもりが助けられた」と語る場面を挙げることもできよう。こうして偶然性のもとで結果的に「あぁ、助かった」と言える場面を列挙することは可能ではあるが、偶然性や結果的に生じる事柄を方略として組み込むことは困難だと判断し、〈助かる〉社会の創出に向けた方略を以下のように検討していく。

まず、〈助かる〉社会で生じる事柄を2つの軸によって分類する。第1の軸は、不特定多数の人々が〈助かる〉のか、特定の人々が〈助かる〉のかという軸である。次に、制度として固定できるか、その場その時にボランタリーに生成されるかという軸を想定する。これらを交叉させると、4つの象限が得られる（図1）。

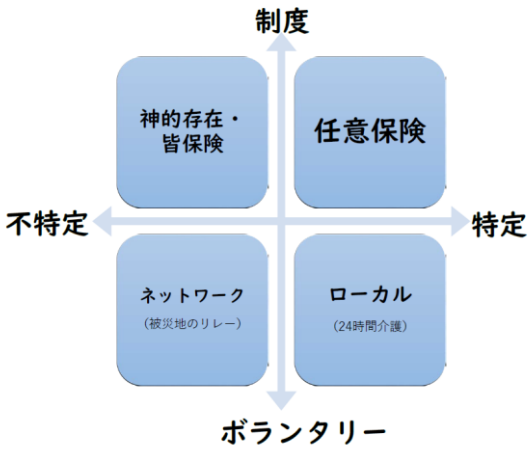

図1　〈助かる〉場面の分類

まず、不特定多数の人々が、制度によって〈助かる〉ケースとして、神的存在を挙げることができよ

う。特定の宗教への信仰や宗教の成立基盤となる制度（例えば、教会組織）を特定しなければ、少々抽象的になるように思われるが、無自覚の宗教性（稲場, 2011）が行き渡っているわが国では、むしろ「おかげさまで」という表現に代表されるような場面である。また、いわゆる予定説を含む宗教であれば、超越的存在によって、（不特定多数の）人々は既にして救済されているわけであるから、制度（救済論に基づく宗教制度）によって〈助かる〉ことになる。

また、この象限には、皆保険制度ないし強制保険制度なども分類することができよう。全員が同一の保険制度のもとに組み込まれれば、それは不特定多数が制度によって〈助かる〉ことを意味する。わが国における医療保険や車両を保有する際の保険を考えればよい。皆保険/強制保険であるから、加入に特段の意志は働かないし、加入という責任は他の人々と同等にもてばよいだけである。しかし、いざ医療を受ける際、また、事故を起こしてしまった時には、誰の意志でもなく責任でもなく、保険金が支払われて〈助かる〉ことになる。

次に、特定の人々が制度によって〈助かる〉ケースとして、任意保険が挙げられる。任意保険に加入すれば、直接的に誰が誰を助けたり助けられたりするのではなく、何か支払いの対象となるような事態が発生すれば、当該保険に加入していた特定の被保険者であれば、保険金が支払われて「あぁ、助かった」という言葉がもれる。しかし、当該保険に加入していなければ、保険金は支払われず、〈助かる〉という実感は得られないであろう。

今度は、不特定多数の人々が、その時その場で繋がることによって〈助かる〉ケースとしては、助けるー助けられるという関係が長く連鎖する場面が挙げられる。大澤（1990; 1992）は、贈与（収奪）の連鎖は、それが長大になる時に、最初に行われた贈与（収奪）の特権性が失われ、あたかも連鎖の始点であり、かつ、収束点であるような超越的身体が連鎖全体を包含する圏域の上に擬制されることを指摘している。例えば、ある事物を与えられた場合、それをあるタイミングを経て、次の誰かに贈与するということが次々と行われる事態を考えてみる。この行為の連鎖においては、当該の事物が与えられれば次に渡すということは習慣化された規範として作用し、もはや誰のおかげで始まった規範なのかということは希薄になり、全体を覆う規範がもともと成立していたかのように現れる。ちなみに、この連鎖の第n番目の人に尋ねたとすれば、「そういうことになっている」としか言いようがないだろう。

ここで災害ボランティアの文脈に戻れば、過去に助けられたと実感する人々が、次の被災地で困っている人々を助けるという連鎖が起こっている。これは被災地のリレー（渥美, 2014）と呼ばれ(3)、その心理/社会的内実が検討され、シミュレーションによって拡大の条件も明らかになってきている（Daimon & Atsumi, 2018）。被災地のリレーが長大になれば、最初に誰が助けたのかは不可視となり、助けられたら助け返すということが不特定多数の人々の間で行われる。そして、被災地のリレーは、不特定多数の人々へと延長されていき、その結果、あちらこちらで「助けることになっている」社会＝〈助かる〉社会へと繋がるネットワークとなる。

なお、ここで時間を積極的に導入すれば、世代間で〈助かる〉事態も現出するだろう。先行する世代から得た事象を、次の世代へと継承していく行為である。ヨナス（2002）が提示する世代を超えた環境倫理もこのメカニズムを通して〈助かる〉地球を維持していこうとするものだと捉えられよう。

最後に、特定の人々が、その時その場で繋がることによって〈助かる〉ケースは、一見すれば、通常のボランティア活動における助けるー助けられる関係に類似している。しかし、そうしたローカルに展開する場面の外側に、別の集団や社会を想定すると〈助かる〉場面が成立しうる。例えば、特定の属性や資格などによって限定された人々を、その閉じられた範囲を中心として関わる場面が該当する。具体的には、障害者支援の現場における介助の事例（e.g., 渡辺, 2003）などが挙げられる。ここでは、ローカルな領域で助けるー助けられるという関係が高頻度に展開する。また、実際に〈助かる〉場面も多々見られるだろう。ただし、これらのローカルな集団を含む社会で問題が発生した場合に、当該の集団でローカルに行われていた〈助かる〉関係が、他の集団へと適応されて、社会全体が〈助かる〉ということになる。障がいのある人々が日常直面している問題は、「健常者と言われる多くの人達が、災害時に抱える問題でもある」（鞍本, 2018）からである。ここでは、詳述しないが、筆者が政策コーディネータを務めた「地域コミュニティの防災力向上に関する研究会」が行った政策提言には、インクルーシブ防災という用語を用いて同様の指摘がなされている（ひょうご震災記念21世紀研究機構, 2019）。

５．〈助かる〉社会に向けて

では、〈助かる〉社会を構築するには、どの事態に注目するのが実践的に意義深いだろうか。ここでは、災害ボランティアに親和性の高い文脈で考えることにする。

まず、制度を経由して、不特定多数ないし特定の人々を〈助かる〉社会へと接続する方略は、確かに存在するとしても、実践的に創り出したところで、最終的には脆弱さを免れない。すなわち、制度による〈助かる〉社会の構築は、一見、頑強に見えるが、実は脆弱である。例えば、皆保険であれ、任意保険であれ、保険制度自体が崩壊するような事態は十分に想定できる。何も事象の発生確率が保険の総額と齟齬を来すといった議論をするまでもなく、被保険者の含まれる集合が崩壊する場合である。具体的には、戦争といった人為的な行為もあれば、隕石の落下といった天変地異などが該当しよう。

だとすれば、実践的に展開すべきなのは、不特定の人々が生成するネットワークを展開すること、および、特定領域での関係の濃密化を図ることである。これらの方略は頑健である。仮に戦争が起ころうとも、仮に隕石が堕ちてこようとも、人々はその時々に応じて〈助かる〉社会に向けた活動を行うことができるからである。筆者自身は、これまで前者について、被災地のリレーの間歇的発生（渥美, 2014）として検討してきた。また、後者については、インクルーシブ防災（ひょうご震災記念21世紀研究機構研究調査部, 2019）として既に論じてきたところである。

翻って考えてみれば、制度に注目しないという方略の優位性は、助ける側－助けられる側といった固定的な秩序を持ち込んでその技術を高度化していくことの脆弱性を示している。すなわち、秩序化のドライブの脆弱さと対応している。

５．おわりに

災害ボランティアに社会を変革していく契機を見るならば、災害ボランティア論はグループ・ダイナミックスの極めて重要な１分野になる。災害ボランティア論は、現場報告や活動への手引きといった形で提示されることが多いが、原理的な考察こそがよりよい実践を生むこともまたグループ・ダイナミックスの基本であろう。

本稿では、災害ボランティアによる社会変革への可能性を踏まえ、原理的な考察を加えた。具体的には、遊動化のドライブを積極的に展開することは、〈助かる〉社会を構築することへと繋がると結論づけた。そして、〈助かる〉社会を分類してみると、その実現に向けては、被災地のリレーの推進、および、インクルーシブ防災の展開が有望視されることを示した。

思えば、阪神・淡路大震災の際に、災害ボランティアに注目が集まったのは、災害ボランティアに当時の閉塞感に満ちた社会を変革する希望を見たからであった。しかし、25年が経過しようとする現在、災害ボランティアの秩序化が進行し、災害ボランティアをいかに制度的に社会に受容するかといった方向で進んでいるように見える。秩序化のドライブをこれ以上推進してみても、本稿で検討したように、その先に〈助かる〉社会は展望できないことは明らかのようである。本稿が、遊動化のドライブを堅持した災害ボランティアによる社会変革に希望を残す契機となればと願っている。

補注

(1) 矢守（2019）は、大澤（2002）に依拠して、能動－受動を徹底的に強化すれば能動と受動が反転し、能動・受動に亀裂が入り、中動態へと至る回路が存在することを指摘した。能動、受動、中動が織りなすダイナミックスに関する議論を展開している。従って、秩序化の果てに遊動化が見えるという事態が現出すると考えることもできよう。しかし、ここでは、もう少し、「ドライブ」に拘泥し、秩序化の「ドライブ」が実効性をもって作動するときには、能動態が能動態であり続けること、受動態が受動態であり続けることをあくまで維持すると想定したい。仮に、秩序化の徹底によって、能動－受動の関係が崩壊しそうになっても、すなわち、もはや（中動化して）誰の責任か意志かなど問えないようになった状態でも、執拗に責任・意志を追求するドライブこそ秩序化のドライブだと考える。こうした秩序化のドライブを想定しておくことが、そううまくは能動－受動の反転などしてくれない社会を分析していく際に強力であることに賭けたいからである。

(2) 無論、災害ボランティアが自らの意志と責任をもって、「ただ傍にいること」を能動的に行うという事態を想定することは可能である。本稿では、こうした能動的な「ただ傍にいる」こととの峻別を図るに十分な理論的展開を行っていないことは自覚しているが、ここでは、能動－受動以前という表現に留めておき、次稿に譲りたい。

(3) リレーを展開している本人にとってみれば、（次に被災された方々へ）意志と責任をもってお返しするという能動性が顕著に感じられるであろう。一方、リレー（特に長大となったリレー）を俯瞰する立場からすれば、もは

や特定の誰の意志と責任をもって展開されているかは定かではない。本論では、こうした俯瞰する立場に注目する意味で、被災「者」のリレーではなく、被災「地」のリレーという表現を用いている。ただ、リレーの参加者とリレーを俯瞰する者との間に、能動－受動、そして、中動のダイナミックスが作動していることについては、別の機会に改めて考究したいと考えている。

参考文献

渥美公秀（2001）． ボランティアの知　大阪大学出版会

渥美公秀（2014）． 災害ボランティア　弘文堂

渥美公秀（2017）． 災害ボランティア論の再構築に向けて 災害と共生,1,3-7.

渥美公秀（2019）． 観光客（郵便的マルチュード）としての災害ボランティア ：災害ボランティア論更新の試み 災害と共生, 2 (2), 9-14.

Daimon, H., & Atsumi, T. (2018). Simulating disaster volunteerism in Japan: “Pay It Forward” as a strategy for extending the post-disaster altruistic community. Natural Hazards, Online first, 1-15.

大門大朗・渥美公秀（2018）． 災害後の被災地における被災者と支援者の関係を考える ：2016年熊本地震における災害ボランティアセンターの事例から　災害と共生, 2(1), 25-32.

檜垣立哉（2019）． 助けることの哲学　渥美公秀・稲場圭信編　助ける　大阪大学出版会　pp.3-22.

本田哲郎（2006）． 釜が崎と福音　岩波書店

本間正明・出口正之（1995）． ボランティア革命－大震災での経験を市民活動へ　東洋経済新報社

稲場圭信（2011）． 無自覚の宗教性とソーシャルキャピタル　宗教と社会貢献, 1(1), 3-26.

ヨナス, ハンス（2002）．責任という原理－科学技術文明のための倫理学の試み　加藤尚武監訳　東信堂

國分功一郎（2017）． 中動態の世界　医学書院

公益財団法人 ひょうご震災記念21世紀研究機構研究調査部（2019）． 地域コミュニティの防災力向上に関する研究～　インクルーシブな地域防災へ～

鞍本長利（2018）． インクルーシブな社会をめざして～東日本大震災以降の活動を通じて感じる課題　21世紀ひょうご,24,52-63

内閣府（2010）． 防災ボランティア活動の多様な支援活動を受け入れる地域の『受援力』を高めるために　http://www.bousai.go.jp/kyoiku/pdf/juenryoku.pdf（2019年5月15日アクセス）

内閣府（2014）． ボランティア関係参考資料　https://www.npo-homepage.go.jp/uploads/report33_ikenkoukan_3_6.pdf（2019年5月15日アクセス）

大澤真幸（1990）． 身体の比較社会学I　勁草書房

大澤真幸（1992）． 身体の比較社会学II　勁草書房

菅磨志保（2008）．阪神・淡路大震災が生み出した仕組み 菅磨志保・山下祐介・渥美公秀編　災害ボランティア入門　弘文堂　pp.110-121

渡辺一史（2003）　こんな夜更けにバナナかよ　北海道新聞社